

史料にみる **歴史**

## 待ちに待った 五代目市川海老蔵の江戸下り

おどりけいよう え どのさかえ  
『踊形容江戸絵栄』（東京都江戸東京博物館蔵）  
〔社会科 中学生の歴史〕 p.118掲載

出雲の国の巫女、と称するお国という女性によって始められた歌舞伎踊り（『社会科 中学生の歴史』 p.95）は、風紀を乱すものとして幾多の禁令を受けながら、若衆歌舞伎（少年による歌舞伎）、野郎歌舞伎（成人男性による歌舞伎）へと移り変わり、元禄期を迎える。この頃までに、人々の歌舞伎に対する関心は、当初の容色本位のものから、技芸を中心とするものへと移行してきていた。

元禄期になると、上方では初代坂田藤十郎（1646～1709）、江戸では初代市川團十郎（1660～1704）などの名優が現れ、元禄歌舞伎として一大開花期を迎える。藤十郎は、作者近松門左衛門と提携して「和事」という柔らかで優美な演技で、町人を中心とする観客を魅了し、一方、団十郎は「荒事」という勇壮な演技で、当時新興都市であった江戸の、活力あふれる人々の心をつかんだ。武士の気風が色濃い江戸の市民に受け入れられた荒事は、二代目以降の各代の団十郎に受け継がれ、その後も江戸歌舞伎にはなくてはならない演技様式として発展していく。

さて、絵の方に目を移してみよう。この浮世絵は、実は元禄期のものではなく、時代を下っ

た安政5年（1858）7月に出版されたもの。当時の役者絵の第一人者、三代目歌川豊国によって描かれたものである。江戸の芝居小屋の場内は、浮世絵のなかでも、西洋の遠近法を取り入れた「浮絵」と呼ばれる作品の恰好の材料であった。極端な遠近法を用いることにより、舞台上だけでなく、両棧敷を含む観客席の様子までが細密に描かれている。実際に上演された舞台を写したのではなく、江戸の架空の劇場を想定して描いた作品である。

当時の芝居見物は、今日の歌舞伎鑑賞とは性質の異なるものだった。芝居は大衆の娯楽。飲食などをしながらワイワイと楽しむものである。女性たちがおしゃれをして出掛けるのは今も昔も変わらない。好きな役者に声をかける人もいれば、役者の口真似でせりふを言ってみせる人もいて、場内は終始ざわめいていた。

舞台上で上演されているのは、「暫」という芝居。江戸の地で例年11月に上演されていた恒例の荒事であり、また、七代目市川團十郎によって制定された、市川家のお家芸の集大成である「歌舞伎十八番」のひとつにも数え上げられる演目である。善男善女が悪者一味に捕らえられ、まさに首をはねられようとするその時、花道手前の揚幕から「しばらく」の声が掛かり、筋隈の隈取り、角前髪すみまへがみの鬢すお、柿色の素襖、三本太刀の扮装で、主人公が登場する。「何奴だエ」と問いかける悪者一味を前に、主人公は名乗りの長ぜりふを朗々と述べる。主人公は超人的な力で悪者どもを圧倒し、悪人方に奪われた宝物を取

り返し、捕らわれた人々を逃がすと、悪者どもの首を大太刀で薙ぎ払い、花道を豪快に退場する。本図に描かれたのは、花道から主人公が登場し、観客の視線を一身に浴びている場面である。近世の江戸では、役者は一年契約で各劇場に所属し、その顔ぶれが一新するのが11月であった。「暫」は通常、新メンバーのお披露目である顔見世かおみせで上演される芝居だったのである。

それではなぜ、顔見世の時期でもない7月に、本図は出版されたのだろうか。その疑問を解く鍵は、役者の似顔にある。本図の主人公は、五代目市川海老蔵（七代目市川團十郎、1791～1859）の似顔で描かれている。五代目海老蔵は、嘉永5年（1852）9月に江戸河原崎座において、一世一代の「勧進帳」を演じた後上阪し、その後数年間は京阪・名古屋などの劇場で活躍した。その旅から戻ってきたのが、本図が描かれた安政5年7月のことだった。海老蔵が江戸を不在にしている間には、海老蔵の長男・八代目市川團十郎が32歳の若さで突然の自殺をはかり、この世を去っている。江戸市民は、海老蔵・団十郎父子の不在を悲しみ、海老蔵の帰りを待っていたことだろう。安政5年7月は、長らく江戸の地を離れていた海老蔵にとっては、時ならぬ顔見世であり、その意味を込めて本図が作成されたものとみて間違いはない。棧敷からも土間の枡席からも、江戸の地になくはならない名優の帰りを待ちわびていた人々の歓声が聞こえてきそうな作品である。

（駒澤大学非常勤講師 齊藤千恵）